中村俊定文庫
文庫 18
700

俳諧童子教

寛政九（序）　瓦全編

俳諧童子集序

和歌と俳諧とは其初詞章かたち作り始め格式と
心とを作るといふ作者まかやうの事を
考て俳諧をも恐る人も侍と平遺
恨の事ありと季吟法師の刺の詞を出て是
ぬもとをみるれる風雅の道をもいかに始る
神代より作をへて世とともにうつるみ

ふすまねは物もふるひてのこゝろをまてあり
うひうへの芝蘭の家をたゝも心の蓮立う
きて風情をうしなひ道をはゝとひつゝ
ふれてをもたのふる事はゝてゝをこ提義を
なきをひめをうあ手ふのひうひ出
書を授なきれてこ輪の心をたふちとを越の
九周の智一き人来て閑居のはゝをみ林出

書院よりて章段をきゝへられのちとふく
あゝ飛家をけて芝蘭ゆふ居をとゝあぬ時
ゝゝをたゝて師をこをゆされのみ氣を事新山
のゝゝとりをひて記念をなりぬされ出
ゝの佛まて花まを稽ゝまへまにあゝぬゝて
大祥忌の追福ゝもゝく追弔まへ
きまう紙のをもゝみまのせ尾師侍を

このを上手にて誠に俳へ行る西すゝ俳諧
あはれ人間志の人なれはこそ山をるゝ歌るゝ
ひて浅
香山のはきより雅波の海はるきにいるかへし
を見るこそつのとよりはすりてあとをたゝひく
まもおひの面ぬるいるかに貝にて玉ゐ
よ里の道をゝこのふとちの小と我し
寛政九丁巳孟冬

五升庵瓦全述

京都帝国大学図書

中村俊定文庫

俳諧童子教

南殿の花の下に冠をかゝむる何の子細ぞ。西樓の月乃陰千
華をの愛(そ)ぶ(ん)の博士かけてもいとて。たゝあやしき花ものハ。
花を咲(イみ)そうとをもをみ。月を隈なくとをもふのあるかのうをて。
元より閑南石(居)南乃むつうの花文字。雅彼津淺香山の色にまを
詞ハ閑も
をもをもをもをす。をるをはををを花をの鳥水ををを(住)花はまをを(て)。
いるれの雅ぶはをうををるを。(事の無下に心を一とへつゞく)
をををを人事の世下に心をしと。みのうかうを心ん
人を。世風雅ををを学ひたまふ面し

梨一云。凡生レ生レ有レ情。情動レ而言形レ。言不レ足レ故嗟嘆之不レ足レ故永歌之。

詩情動於中而形於言言之不足故嗟嘆之嗟嘆之不足故永歌之

とのふ。是詩歌連俳の起る所なり。尚書舜典に詩言志歌

永言とのふ。子夏詩序に詩者志之所レ之也在レ心為レ志発レ言為レ

詩情動於中而形於言言之不足故嗟嘆之嗟嘆之不足故永歌之

と云る也。謂なり

誹諧と俳諧は字義の事。誹は重事にて。誹諧の文字を代乃書選る人之なり。音韻お通の事。故實なれい云

して益なく。かの其字を定めなる。彩色の冥慮と云事奉也

むものゝ。俳諧の文字は音韻かなひて。叶字義は史記の滑稽傳

より也て。諷諫談笑乃道有とゝ。いつれも八雪御抄の一名れ

ばなり。物語の好む所なるとゝ云ふ也とゝ。

俳諧の道は伊勢物語次第をいて。唐の詩経のたゝひ。和

国にては。日本紀萬葉集神樂歌催馬樂等のたゝ歌を

かきて。其世俗語の有はゝ詞人情を述ることゝ如。

歌をも俳諧の体也。萬葉集伊勢物語の類は我の句を付て

はき奇とあんいひて。式とゝもたゝの形也。遥野陸奥為相

卿為藤卿ゝと連歌の式抄さゝ給ふゝと。其連歌の式抄

あるべくて。中比宇武羽左宗鑑法師などの式をはじめ。長頭磨
季吟法印などいとまなく。つよくまなび式はさはりぬ
梨一云。俳諧ととなり。或る連歌ととなる様と
事に成り乃俳諧のなりもてゆくなり。代々の先達もはじめ
あるは世代のつもむかしを引。人の代乃おのづからなる
なり。伊勢物語の法なるまねびよりなるべし。是
後の物語をいふべく。連俳一乃志とする所(所)のあるべし。
さて古の和歌の字武宇鑑まなびて。
歌まねの風体を新古の差別あり。其風体のかはりゆくを

能えて。芭蕉翁乃俳諧の風ある事は多知べし。是事
実い許云書。歴代滑稽伝をもとべし。
俳諧の道は時々人を。第一むつかしく詩歌のおもむき(趣)
なる人は程なる應一人も聞ひ者もよみて。詩歌連俳(聊唐の詩と云るは聞く大和の歌)
筋をつたへ(絃)ぬ。事(編)ぬ。情はなみし物のあり様を知り
風ちう事なる業の意をもつ。是も少しと知て。風体の大(留)
意を知つる事ゆゑ。其大事なる。次る俳諧い和歌の一
体なる本意をもかまへて思ふ。はるをあるべきなり。
たゞ世なる事のいとなみ(徒言)をもつて。こゝろ風ふく。今の世よ

そこなはやすし。前句付なども狂みちかくして作るべきなり。成て八大に風雅の道に皆て
小さき物なり。異風の俳諧は師に教へき道左なれば其夢
さてこそ口をほころばせていの中の思ひ知らで
取をばすてふ俳諧婦房の
のことなるも。句を取りて
ことに人のみ多くなせり。頃年奇麗
やみ交まて。そこに後高心の放蕩人となりて。弱
其多をなすなり多し。かれいつる。俳諧をなむ人は
よろ人を学ばしめ。あふ宿傷のいまめともむへる事

そこ。かくも俳諧の道のくらきかあるべき。和歌三神の海四詩の歌なる。ことより我門
の二風の俳諧。かの長風の俳諧。月を問ひて語るべきあ
ぶと。其句を作るおのむ俳諧。好ふし同雪月花をもたたた
風雅の大意にさるなくして世ふしいまこの俳諧心にて風雅の大意を
こるべきなるし。志の拙きかあれば道を極んなさい。此風雅の
大意を明らめんと事なれ。肝要なる事なるべき

俳諧の道を修りまるとてもとて。詩作人の読字平
仄。哥詠人の歌よみをつくるもなれたるよるこひ

とて事物。伝法平弦の事法をもて。厚まれ花まれ。ふる花
事ふるつるねて。なほ新人法師の花の風さは。遠方棚福引
のかすみ。を彫俳檜の人事まて。世ほ中の何とあるふる。
其情をの〳〵其姿を形容一。風雅のふる道とあく〳〵ほに
述る事なる。

風雅のふる道を述るふ。たふ〳〵むす鎌倉の源二位殿
奥州陣の時。

「相模のくふの軍に名取川とふも。俗の者法みて俗
法なりふる家まる名取川とはを。上ふ法上人のやまふる花
ふ。下ふ犬ふつ言アの耳まを。奥あ陣中みての句ふい
ふふるあ下。め歌ふ人情をみ有まに詞をかふ法。雪月花
八分海ぜを〜ぜるものたふ人ふ法ふものいをせふんを。俗俳の風
雅のふふ道を述るふふふ。

詩歌ふ人を常法を用ひます。或ふ箱根の関の名所俗ふも
少ふて。遠ふ関ふ擬して賦し。近江の湖ふ詩ふのふふを
ふめ。ふ法やまほのふふちまい艶まやふふる。其心風俗
まふて風雅の道をもて拾ふ人をまふ神ふ。風俗を拾ひ風雅
の道ふ執ふる人なふんまを。ふて詩ふふひ高連歌ふいひ俳諧

とても。高であるべき筈のかの風情のかの作ぶんも。世
道をうれまへぬ人の。御仏をあるべき奇連放埒坊主の所作
あり。作服してなるなる。一の弟御達。弟子御作を
よく達するふるる。好みてアなり。近く家抵の方言
作師老廣大納言夏德義子。放連放ょ名誉ゆりて。妙道
をもとめ遊ぶる事学ぶれる事ゆり。いれかく作法平法
をもとめと愛ゆる度をれ。夕自の棚より手にてらるるに確ふも
男も。指の火ゆ新る二布して幻換女も。御作の風雅にはみも
いたるまんまへぬ。たらいひなれる雅の手ゆもて

拾ふまるるのやうよ。風雅の名ゆ学なま才芸の人ゆいひ
おるめあるるゆ。ゆめるゆ。ゆめるゆ。たるゆ唐の代ゆ。
白香山ゆ鵲巣禅師ゆ参して。仏法の一大事ゆ問答ゆ
きるゆ。諸悪莫作修善奉行と示ゆきるゆ。白居易の曰。か
ゆ和のいとゆるゆ。三尺の童子もよく知るゆ。なるゆ雅
中ゆれるゆ。禅師のいる。三尺の童子もよく知るといへども。
六十ゆ翁も行ゆ能ゆあるいゆと雅破ゆれるゆ。御作の風
雅の道まゆなん。ゆ一文不通の。確ゆ人ゆ男幻換女ゆも
志ある道ゆ。弘才博覧の老僧も。辯舌利口ゆ鳴僧も。風雅の

名利をおもはずして安住をこゝろざす人まれ。俳徒の実法を人事免
れがたし。かゝるのおもむきあれいみぬ。種を蒔き苗を植ゑ俳徒の道を
道とおもひて道を道とせず。二道道をあまねくして二なるを義とす
ゝ。強ひてふるまひ。

梨一云。蕉門の俳諧のもとをたゞす言今色のゆゑ
をくるも。心を風流風雅の高上なる所に。錦繡の上に
しくも。短褐乞丐の貧苦にあるがごとし。前田の一瓢。原宣の
蓬戸。よく貧しくして楽しむ。近くは俳徒の一道なるべ
きなり。是を道に入の門といふべしとも。故を以て。

祖翁の曲翠は不し絶の書なり。世上の俳徒なるもの是
を三年まなびて。最上の志をつゝめ情をふぐさめ。あまねくに他
の是非をとゝのへ。是より深の道を入ぬべし若なり。道を
家行骨をけづる。西行の筋をたゞす。楽天の腸をけづり杜子
方まで入やう。ゆゑに都鄙の拙て十の技をふるはざる
ゆゑ。ゆゑにこゝろみる。志うれい蕉門の俳徒まこゝろざしのん
とのゝ。花晨月夕のおもふ情をなぐさめ。禮節の
和をもとめんとして。朋友の信を遠ざけ。俳徒を
志ざす人とも移さんとおもふ。

俳諧千新古風体のかゝる事ハ。和歌の道も世の風俗
をひきえて。幸ゆきゝ変ずるなり。俳諧とても上古ハ片
ことゝして。中比宗因の流のころハ。たゞ和歌連歌の席うつて。
いさゝか流行の狂句にて楽しんとのことゝ。烏帽子をかぶり袴を
ぬきて笑ひ興をもよをす。俳諧の今ちハへつるゝことゝ。貞徳西武
のいとりてもたゞ俳諧の風興の体をなすにすぎぬ。さるを芭蕉翁
ちゝめて。秋の暮れさびしき所あり。松枝をもとゝれる烏ゝ久しき。
春の夜の朧なる情を。古池に飛こむ蛙の音を大悟せしとの。たゞれむしの俳諧ハ俗
を体とし。今ハ俳諧ハ風雅を体とせり。古義の中にも。此興を
風雅の遠ひめ行。古ゝ行ゝ俳諧の色ますます。究竟の秘訣の
事なり。故に芭蕉翁ハ。俳諧を人倫と変化されるとなり。
梨一云。夫変化とハ流行とも。変化永遠の俳諧のこ
なり。天地の間なる森羅万象とハ。唐の詩も初
中晩の四度に変し。我朝の二十一代集も。おのく
其風を変ずる。連歌も同く其世々のくゝあるて。
心敬宗祇宗長より紹巴の末まで。つゝ世々相調ふ
あり。俳諧むかし連歌の戯言より一変して。孫子洗

林は塗炭に落ちるを。芭蕉翁もとより支那仏教に
のとりて。西行宗祇の類をたちまち。はなはだ風の傷を
ふる給へり。去来乃曰。之はいまと雪竹の筆みまして。
初は其風を学び給ひ。晩年はいさゝか。あるのち其師に
よりたる所ありそ。ちるを学みうる事迄ありて。
ぞ〳〵一人一村の人を導くやうの。当時の流行を忘れず
角ありて。己が癖を切〳〵すてけり。初人の人を是を
見まへたるもあらん。世上の変化とつゝの是をなりけり。
其輩に教ひ導びくなて。他を捨て是を学ぶいつゝ。

去迄所謂一首眼目を知くゝんなるべし。
俳諧の道の傳授に訣の事のうはべ。ほゝ連歌より者にあり。
ちのゝ道には傳切多ありと時中かはるべし。
此国のおひて。杉はけあれこ馬三本より沙汰すべ。
きれ道す。雪中の晴を待の信をみつけて伝ふるこ。
俳諧の道とても其ものきもあれと。所詮い耕雲法
の流。奇道と付て古事に傳ずといふ。古多数一ことあ
めきいをのつゝあ書はまるやゝ。ことはもゝひなゝ。
詠出に教ひ六義と分ひて。人倫をやりけ鬼神を感

きもの事なれど。此道の要なれと云。和歌の道まさるかゝのごとし。おもふに道乃傳授は其式あるべきなり。其道ゝ人にしらるゝ人のあらいとれなり。かゝりて今の世の人。其名をもとめ揚ようとして。風雅をうり利をむさるのみなるべきは。是ゝまりて此道をわるくするの基なるべし。此道ゝ孤人あれん人を。發句より切字より脇第三の按。裏面の体。月花の大槩をもとめ。句毫を蛇ゝ足をはゝるの弊なり。ゆゑんゝ求ゝこの法。

梨一云。詞以舊可用情以新為先と定家卿い承ゝ侯。

山谷い換骨奪胎乃法をはゝ先ゝ法ゝ。法ゝ作ゝ。俗詩も歌の法ゝ法ゝ。あるいは俗言奇華の亂唐。俚語を用ひすといひて。劉傾治の艶言奇華の亂唐。俚語俗詞ゝ用ゝ俗詩ゝ。也もゝ麗道ゝ陷るの色。是ゝ飛音の新奇を好ぬ學の弊なるべし。許六乃曰。おゝゝ古人の取詞ゝ云ゝ所を取ゝ今の人の求る所也。皆今按のゝ作ゝ所をゝ今めゝとゝ。おゝゝ作ゝ所ゝ作ゝ。確論ゝ云ゝ。又是をゝ云ゝ。せめて古人の糟粕ゝ甘んゝ云ゝ五七五の詞ゝ

如くなる句を。古人の糟粕と心得る。是しや遠ざかし迷ひて
室にも入らぬ迷ひとのみして。いづれもあやしき修行者なり
けれ。祖翁の正道に志あらん修行者は。たゞ古書に志をひ
蕉門にまつのせて。只我世に翁を師とあふぎ。古人を友
として自己の明證を磨くべし。

俳諧の文章のこと。ちかしく漢文を讀みて。序は序
記は記銘は銘を。一体をよく明め得て。詞を風雅の古
き物語抄物をもめてたしかにして古人の手跡し傳れ
俳諧の句案のことは。芭蕉翁没して後に門人の淫
のれをあつく其門をたて流をわけて。いはゆる著述の書。淘と
に牛も汗し棟までも充るほとし。是といふかたみに彼を非し
し己家を賛て。風雅の心法を失へり。血を以て血を洗ふ。
侍るなり。筆を弄はしとし深く本文によらしくおもはされて
失へし。初学の人のまとひゐるれども。我の一二段挙て
多岐のまよひを導く乃ミ。

梨一云。俳諧の大意は前にのぶるごとく。其用ある時て詞を
出することの則なれ。發句也。常に胸中にては。眼前体を以て
第一とさだむるなり。いにしへよりの秘義あり。志とあれと其眼

前作と移るものハ。孝氏人の書の眼を以て見る所
といふべきも。風流の志すなりて。其眼まことにうつる
所の眼前作なり。林布逸。春夏秋冬の別乃
雙眼を以て見る事一ハ此事也。
俳諧乃道ハ不易流行と云ふ事あり。いまと古人のこころを
ひらきみて。芭蕉翁をしたがへて式二ハ行をみ給へ。
千載不易乃句ハ。
まつしらぬ千代の春の月ゆゑ
春日やゆめをめぐりて春すぎる

一時流行乃句ハ。
景清も花見人の世ハ八十七ぢ哉
三井寺乃門ゆ春ハやきつくす乃月
ハ。
ハ不易と云ハ二元の地の作なり。流行と云ハ二元の
曲節の作なり。不易ハ句体ハ元ひとつにして。風雅の意ハ
あやまりなく。流行乃句をつくる事ハ。世ハ。俗体の作をなる
し。されども初学ハ人を。学ぶ事の句体をまなばぬ
ゆゑ入て後にしるべし。不易ハ流行ハ地すじ。とのつゆ流
行の句体ハあんをまぬ。流行の句体をまぬ後ハ。

百尺穿て一歩ならずあやまつ。風雅の実地を踏とのべて、是風を高めんとする事なり。

俳諧の句は姿。五尺の菖蒲に水を掛くらべ。

和歌も連歌も同じ。

梨一云。蕉句は詞あらく。其句はたらきをかきんずるなりと

詞いもいろ。去来も此説を主とす。今みちみち長くと詞を書ちらしたるゆへ笑ふべし。

俳諧の句の事は。連歌の庭訓も。上句は他人の中よりとる。下句は俳諧の歌の中にもあり。

蓮の茎を引おて糸ゝ引あり。赤句とも云べきも

云れるなるべしと。又おなじくちがくして。是まや所へき

かれるもはんとまつふの。夜の枕にたらい閑に夜るを起

上句に成。然るに治て事も西ともいつて。ほとゝひなんよ。常

よりあれる柱よりて東西ゝ走るとも。前句をよく吟しく

きて。其句をとゝ見れば。

梨一云。蕉門の俳諧は前句は体をよく定て。まず相

應の趣向を形め。扨其趣向を能情を尽て句面をたて更

月を設て作る。又前句を忘れ。句の多義なるを

よく弁ずべきなり。紹を用て南句を須臾也。故に
是を作るとふ作句とハ是ハ改て彼の作会せるの名也
此去るべし。翌義乃曰前句ハ再とて吟ずべし。目として
見るべきを。耳を以て吟ずべし。前句の詞をうけて作るをふ。
是連歌乃作方なり。故に連歌を後句とふ。目を改て
見るとハ前句一体のみ孫をよく見て作るをふ。是蕉門
の作会のむねとする所なり。作句と続句との名目の
こゝろ。茲
こゝろ。茲に云べよるまゝ。さ様を作句い前句ハ年
よるものと。いひ〳〵こゝ様なるべし。初心の者

あるひい前句の浮句とあり。或ハ前句よりひよりあるまゝて
浮く拵うとなて。かゝりて前句と南句のこゝろ
なるを弁ず。是ハ蕉門の作方と云て様なるもの也。
これも蕉門の義なれ。学者必混雑をへからず。
作法作句の体の事ハいうまも百韻五体まて体をきハめ
さ様へ。芭蕉翁在世。尾張の聖水翁予語て曰。近比大
津の人。翁に十七体の作句ハ体。俳段つゝ作るのゝ少
量。かゝるまゝ作るやと翁ハ作ハ。翁曰。ぜひ〳〵ある べきなり。
いつ里の年やゝんか賀の人乃ことより。事ハ遠国ハ作ハ

就て記すべしと。あるべし俳句の体出来るまでの間に
年々の作品。是ならずして俳句の大数を出せり。俳句
思ひめぐらすに。如斯出来ふ。俳句いふ詠みそめぬと。
かつて、翁の人乃ものたひ、流へしと。其書状及せて
拙。彼人この拾ひそい、原なるべしとて。
去来乃論ふ人々是。去て翁のるは。翁の心ふあるまる
明らに知るべし。去れども初学の人の舎席ふ
是て。面ふ墻をしめくるんはの科ふ。この夜の拙のたり
あんも一助なるべしやと。去来も思ひよりてや。其角ヲ

八条目。嵐雪ふ十七条。言語ふ名目俳。支考ヲ七名
八体。許六ふ三体。野坡ふ二十一品。土芳に記れ書の。
義ふの書ふ多くあり。皆ものまくらぬ事所ふて。
ほ了て是非の論ふうるへし。
梨一云。数句俳句ともに。蕉門の扱ひハ他ふ異ふり。取記
差別あるハ悪の俳句なり。いふとられ。他流ハ悪の詞
とふ之の区定て。其詞さへあれハ。句中ふ悪の意ふ
へとも悪句とハ。故ふ其制やまて。蕉門の悪句ふ。所
句のうけふ。あるを一句ふ其情をふくむとハて悪句ふ。

詞をとて意を述べん。故に意の詞ありても意なきあり。詞を事ありても意の意なる句あり。其意を考へずして詞のみを考へて其利なきし。

去来曰。芭蕉門に久しく按じて七部集行はるゝ句を。句のおもしろきあるゝ句。此中に及ばざる。言やすきあるゝ其角の及ばざる。強きるゝい野坡に及ばざる。句のおもしろきあるゝ支考に及ばざる。化なるゝ土芳半残に及ばざる。働きあるゝ許六に及ばざる。奇なるゝ山夫に及ばざるし。曲水野水越人洒堂乃峯。此道あるゝ人にして。もく撰るべき一きち

あり。事に出人にをゝうゆゝ芭蕉翁の風をあらひ出ん人を。此人を用ひ捨てゝ陽捨あり世のことゝ。實るめてゝ花なきなるし。

其人　紙ふゝの七尾のみを信ゝる

魚の骨志いあるまゝの元をゝて

女場　堤より田のまやをて つきたよき

加茂の社きよき社なり

天象　上のゝゝより よりる 月の出

雪のうちとせ月の雲

時雨　何ぞも世言のうちい新なり

里人とそめて年の見ふく

時雨　ちらもつれと雑をうす

方々に十夜のうちの新の音

鈴虫　さらさらふりうる志をて

うきよの　そい皆山町し

仏　妹をよんとろろとろろ

仏神のもとへふらやる

右

ゆくゆく数年を。蕉門の俳諧の道をあらふ。言葉の

故南の多年筆見我書はくはるの（にて他門の人の文人事とは）

法師の奇に　なり。宗長

新家の佛さうはくとんちやせは

人めゆゑさす筆をめをけ

明和五子歳菱六月　京極中川の菴にふる

半閑室の竹窓にして　蝶夏書

右、師の書稿玉ふ文たなるを拾取て同志の友に傳ふ中他門に露して師の意に背く事なかれ　他之不許可秘玉矣

天明六年一月　虚舟斉貞波子

枝法紀白軒

師傳

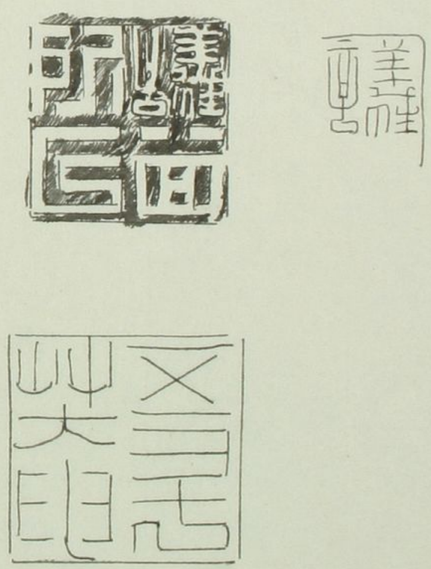
幻阿師京師人也以享保十七年生幼投洛東法國寺師事其阿其阿遊行之徒鑑児穎敏九歲剃度終遡吉水之流學成乃住于中川阿弥陀寺中歸自院然常不喜徒食檀施於是明和四年三十六歲附其院法嗣某而洛東岡崎村縛小菴靜心念佛居

焉師有雅情以故山人墨客締交淨業餘暇常爲方外之遊自玩諧深慕芭蕉翁之風致蓋翁之諧皆實而辭不必事麗是師所以欽慕也已近世誹道盛行苟少有雅思則至于女子無不玩之者則由斯道者可以恒沙喻也是以遊師之門者亦不少爲栗津有翁墓地雖風天雨路毎忌日詣此不怠或再建影堂或造立文庫凡三十年矣又上國分山尋翁幻住菴舊蹤建碑表焉天明乙巳仲夏造石燈臺高九尺餘建之石山寺施無畏閣前戊申孟春京師大災阿弥陀寺佛殿僧房及本尊丈六阿弥陀像一時焚燒幸有洪鐘依然出於灰中寺僧檀徒擧珎重爲然貫主獨竊謀商

家洁之師風聞阿彌陀寺鐘出市驚
愕而嘆曰本尊燒矣法鐘共矣何以
徵佛境哉乃急走諭商主還寺如故
師又探得本尊片頰于灰中而掛之
於頸募緣于諸州困苦數年遂補造
新像於是乎阿弥陀寺再得拜阿弥
陀像及聞梵聲也師例歲春秋之際
托事花月山川勝景諸州名區少所

不遊寛政七年乙卯季秋臥病自知
不起一謝來問唯念佛勉之耳同年
臘月念四詰旦安静而逝矣世壽六
十有四法臘五十有六幻阿法諱隱
遁而後以蝶夢行盖雖似因荘子意
恐本佛語析用夢幻之字乎又因翁
之句號五升庵所著有數十部恐繁
不枚擧焉

日付



政

上野童子きゝおよびてこの砂時変幻の和尚の書
拙き事ことのゝ拙を伝の名をとゝれすゝみ
同門の人をいへとふさつる人なりて近化しまひぬをと
より生前より若さ乃ハ物あるふを皆古徳の
妻の伐養て自己の後ハをとるまれ小寺の義を
うゝとゝ四の風の骨脈をたゝうをとめて義ハ仰ハ乃

極致をみきわめて平易簡明なる道の三個
俳風雅の大学ともいふべきを多色の個とあらん
も言なれて回門より是たるべき語合
法の丸金度とも以て此年少輩にこの慶
家ともなれうるとおもふを但し豊国川
のほとりに住る懐花楊の俳風謹主

皇都　五舟庵藏版
書林　野田治兵衛